

字書『類篇』のザンネンな実態

水谷誠著
『類篇』研究



A5判 256頁
汲古書院
[税込 6,600円]

澤田 達也

水谷誠氏の『『類篇』研究』（汲古書院、二〇二〇年）は、同氏の『集韻』系韻書の研究』（白帝社、二〇〇四年）、『詩聲樓學—中國古典詩用韻の研究—』（研文出版、二〇一五年）に続く、三作目の論文集である。本書は全一四章からなるが、中心テーマである『類篇』に関しては第一章から第九章において論じられ、第十章から第十四章では「小学書の周辺」と題して、字書や韻書、唐詩の用韻に関する論考がまとめられている。各章のほとんどは二〇〇四年から二〇一八年にかけて発表された論考をベースにしており、概ね発表年代順に並べられている。そのため読者は著者の分析作業の過程を追いながら読み進めることができる。

本書が論考対象とする『類篇』とは、北宋・治平四年（一〇六七）に成った官撰字書である。宝元二年（一〇三九）

に完成した『集韻』の直後に編纂の必要性が奏上され、二八年後に完成した。体裁は『説文解字』に倣い、本文一四編と目録一編からなる。『集韻』とともに、『広韻』・『大広益会玉篇』を継ぐ「篇韻」として扱われることが多い。また、編者に司馬光の名が冠されることもあって、一般には価値の高い字書とされる。そのため、この『『類篇』研究』を手にする読者も『類篇』がいかに素晴らしい字書であるのかを本書が証明してくれるのではと期待するかも知れない。しかし、その期待はものの見事に裏切られることとなる。

先に結論を述べることをお許しただけなら、本書で明らかにされるのは、『類篇』という字書がいかに「ミス」、「不注意」、「不手際」（いずれも本書第六章にみえる表現）に満ちているかという事実である。本書の著者はこの字書に対し、最

終的には「司馬光という権威に支えられて散逸しなかった」とだけを多とする寂しい字書」（第八章）とまで言い放つに至るが、そのような一種「寂しい」結論に至るまでの分析過程が本書には記録されている。「長いこと時間をかけて調べたことの結論としては、いささか情けないが事実を明確に述べることの方が何より重要であろう」（第八章）という言葉は、却って著者が『類篇』に掛けていた大きな期待を反映しているといえよう。

本書は、韻書『集韻』と対となる字書『類篇』の真実の姿を、詳細な分析を通じて明らかにした論著である。本書を通じて『類篇』編纂の過程でいかなる問題が存在したのか理解することができるはずである。

以上、前置きが長くなったが、以下まずは目次を掲出し、その後、『類篇』に関連する章に絞ってその概要をご紹介します。

■『類篇』研究 目次

序章 なぜ『類篇』を研究するのか

I 『類篇』研究／第一章 『類篇』は何のために編まれたか／第二章 『類篇』増補についての一考察／第三章 『類篇』はどの『集韻』を用いたのか／第四章 『類篇』

反切相違の一要因について／第五章 『類篇』における例外反切について（部首篇）／第六章 『類篇』の脱落字について／第七章 『類篇』反切誤記札記／第八章 『類篇』の無義注について／第九章 『集韻』の脱落字について

II 小学書の周辺／第十章 『集韻』での『説文解字』の影／第十一章 李善注に見える典拠不明の訓詁は何かから採られたか／第十二章 多音字、重、及其聲調三分問題／第十三章 白居易怎樣用多音字、重、押韻？／第十四章 關於元代韻書 兼論高麗朝和朝鮮朝的影響

序章では、『類篇』が先行する『広韻』『韻略』『玉篇』のセットに続く、『集韻』『礼部韻略』『類篇』というセットの一部であること、従来『類篇』が研究の対象となることは多くなく、その研究が著しく遅れていることを指摘する。その上で、『集韻』との比較を通じて『類篇』の理解が進むであろうとの展望を提示する。

第一章においては、冒頭から『類篇』は『集韻』の焼き直しになっている（八頁）という衝撃的な結論が述べられる。ただ著者も言及するように、類似の説は既に小川環樹一九六二¹が提示しており（『類篇』の内容は集韻と同じであって（中略）

そのまま機械的に並び替えただけ」、ここでは「別の角度から、調査検討をしてみた」（九頁）として、『集韻』と『類篇』の又音（多読字）に対する処理方法の差異に注目して検討を進める。『集韻』の縮小版というべき『礼部韻略』では多読字に対して圈点を付し標識としているが、『集韻』には圈点がない。しかし又音自体は『集韻』においても積極的に収録を試みている。ただそれがあまりにも膨大な作業となり、圈点などの表記はあきらめざるを得なかった。著者はその実現が『類篇』において試みられたのではと推測する。実際、『類篇』においては「どの多読字にもきちんと又音表記が収められて」（二二頁）おり、そのことから『類篇』は『集韻』を再構成して作成された「又音字典」であると指摘する。ここでは結局、『類篇』には『大広益会玉篇』の後継の実質を伴っていない（二七頁）という評価を下しているが、一方で『類篇』を利用することによって、『集韻』の研究が進むこと」（二七頁）に価値があると著者は述べる。本書が『類篇』の研究書であると同時に『集韻』の研究書でもあることがわかる。

第二章の初出は二〇〇四年であり、二〇〇七年初出の第一章よりも先に発表された論考である。実際、第二章から読み始めた方が、著者の問題意識をより深く理解できるかも知れない。『集韻』の後に編纂が始まった『類篇』では増補作業

が行われたはずであるが、本章では、『大広益会玉篇』所収字のうち『集韻』未収のものを対象に行われたのではないかという仮説を立てる。これは著者が二〇〇二年の論考『大宋重修広韻』と『大広益会玉篇』²⁾において提示された説を踏まえたものである。ここでは『集韻』増補の際、『大広益会玉篇』収録字のうち『広韻』未収の字を対象に、一定の基準で増補作業が進められたことが論じられているが、本章では『類篇』でも同様だったのではないかと推測する。その上で著者は『大広益会玉篇』『集韻』『類篇』の三資料について比較検証を行うが、その結果得られたのは『類篇』における『大広益会玉篇』からの増補は極くわずかという事実であった。つまり、当初の仮説は否定されたわけである。しかし、そのことが著者がその後『類篇』の編纂目的を探るきっかけとなり、本書全体の論考につながる事となる。

第三章以降は、第一章で提示された『類篇』は『集韻』の又音字典であるとの説を様々な面から検証する。

第三章では、『集韻』の現行テキストとの比較を通じ、『類篇』反切は述古堂本に拠るとする。このことは『集韻』現行本中、述古堂本がより古い系統である可能性を示すとす。

第四章では、『類篇』の編纂は複数のグループに分かれて行われたらしいこと、集字作業は例外もあるが基本的に部

中国年鑑 2021

◎ 好評発売中 ◎

中国研究所 編・発行
明石書店 発売

1955年創刊。現代中国に関する最新・基本情報満載の、
一国を扱う珍しい年鑑。

B5判 512頁

(カラー口絵8頁)

価格：18,000円＋税

◆特集＝コロナ禍と米中覇権
争い

◆動向

政治、台湾・香港・マカオ・華僑、
対外関係、経済、文化、社会

◆要覧

国土と自然、人口、国のしく
み、軍事、少数民族、国民経
済、農業、工業、資源・エネ
ルギー、交通運輸、対外経
済、知的財産権、労働、暮ら
し、社会保障・医療制度、環
境問題、教育、NGO・NPO、
文化、宗教、日中関係ほか

◆資料

統計公報、重要文献、主
要人事、2020年日誌ほか

※お問い合わせは中国研究
所事務局まで

=====

一般 中国研究所
社団法人

〒112-0012

東京都文京区大塚6-22-18

TEL：03-3947-8029

FAX：03-3947-8039

e-mail: c-chuken@tcn-catv.ne.jp

URL: <https://www.institute-of-chinese-affairs.com/>

首ごとに分担して行われたらしいことを指摘する。その上で『集韻』は成立時から『類篇』完成までの約三〇年間刊本が流布せず、抄本で伝わっていたのではという仮説を提示する。第五章では、『類篇』の部首反切の多くが『説文』目録部分に依拠することを指摘する。

第六章では、『類篇』において「勤」「故」「右」「酒」など常用字の脱落が見られること、「惡」「鈔」「處」など典型的な多読字の字音の一部が脱落すること、さらに『集韻』に収録される異体字のうち『類篇』未収のものが四四一例あり、しかもその選択に統一した方針が見られないことなどを指摘する。このような『類篇』編纂の状況に、著者は「いい加減さに慨嘆せざるを得ない」(二〇八頁)と痛烈な批判を浴びせる。

第七章では、『類篇』における反切誤記の原因について、

編纂時に使用された『集韻』の小韻代表字に付された圈点のサイズが小さかったためと指摘し、現行本では述古堂本がその姿に最も近いとする。

第八章では、『類篇』の義注に関して、①書名が不規則に省略される。②『集韻』に見える仮借の用例が削除される。③多読字について代表字のみに義注が付される等を指摘し、字書として「手抜き」であると批判する。

第九章では、『類篇』との比較から、現行本『集韻』において極めて少数ながら収録字の脱落(計二〇例)が見られることを指摘し、これらの脱落は『集韻』完成後ごく初期に生じたものであろうと推測する。

以上ご紹介したように、本書では『類篇』の種々の問題点が挙げられている。この実態を見る限り、『類篇』はたしか

に「司馬光の權威に支えられて」辛くも伝存しただけの字書との印象を強くする。著者が結論付けるように、『集韻』研究に利用されるだけの価値しかないと言わざるを得ないのかも知れない。ただ、これは評者の感想ではあるが、『類篇』はその成書後も、南宋・李燾撰『説文解字五音韻譜』の編纂当初において利用されたり、同じく南宋の『盧宗邁切韻法』に言及されるなど、一定の影響力は保持していたようにも感じられる。金代の『群籍玉篇』にみえる現行本とは異なる『類篇』の引用などもまた、その影響力の何らかの反映ではなかっただろうか。

最後に一点、評者より著者に質問をさせていただきたい。本書でもたびたび触れられるように、『類篇』は編纂開始から二八年もの時間をかけて完成した。その理由について小川一九六二は「恐らく政治情勢の影響」と述べているが、著者はこの点に関してどう考えだろうか。政治情勢の影響か、それとも「手抜き」や「不手際」による遅れだったのか、はたまた……？ また、『集韻』編纂時には南北知識人の対立が背景にあったとの指摘⁶⁾もあるが、『類篇』ではどうだったのだろうか。是非とも著者のご見解をお伺いしたい。続編を期待して止まない。

なお、本稿では第十章～第十四章「小学書の周辺」に触れ

ることが出来なかったが、例えば『文選』李善注を扱った第十一章などは興味を持たれる方が多いのではないかと思う。また、第十二章、第十三章は多音字「重」に関する論考であるが、特に第十三章では唐詩にみえる用例を分析しており、唐代文学に興味のある方には是非一読をお薦めしたい。

【注】

(1) 小川環樹一九六二「宋・遼・金時代の字書」(もと『東方学会創立十五周年記念東方論集』(東方学会)所収。のちに『中国語学研究』(創文社、一九七七年)所収)。

(2) 『集韻』系韻書の研究(二〇〇四年、白帝社)所収。

(3) 高橋由利子二〇〇二「和刻本『説文解字五音韻譜』の依拠した版本について」(『中国文化―研究と教育―』(六〇))参照。

(4) 魯国尧二〇〇三「『卢宗迈切韻法』述论」(初出は一九九二年のち改題加筆して『魯国尧语言学论文集』(江苏教育出版社)に所収)参照。

(5) 大岩本幸次二〇〇七『金代字書の研究』(東北大学出版会)参照。

(6) 平田昌司一九九六『廣韻』與『集韻』(もと『中國文學的多層面探討―語文情性義理』(臺灣大學)所収。のち『文化制度和漢語史』(北京大學出版社、二〇一六年)所収)。

(さわだ・たつや 京都産業大学)